

札幌市文化財調査報告書

XXV

1982

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 XXIV

S 153 遺 跡

—1980年度発掘調査—

1982. 3

札幌市教育委員会

例 言

- 1 本書は、昭和55年6月16日～7月19日にかけて実施した札幌市白石区厚別町小野幌14番13、51、56、94にある王子不動産株式会社の宅地造成予定地内に係るS 153遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、札幌市教育委員会文化課文化財保護係の加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二の3名が当った。
- 3 本書の執筆は、上記3名のほか旧村美智子が分担している。
- 4 発掘調査には、下記の人々が従事した。田部 淳、浦口 護、屋代正之、山村美智子、高谷幸男、末広智裕、山口 清、札幌大学学生ほか。
- 5 挿図作図・浄書は、旧村美智子、岡田知子、横地様子、野瀬恵美子、大野ひろみ、加藤和代、朝日征行、浦口 護、高谷幸男、末広智裕らが当った。
- 6 発掘調査、整理において下記の人々より助言と協力を賜った。
大場利夫
北海道教育庁文化課
北海道開拓記念館ほか
- 7 発掘調査、整理作業、報告書出版については、王子不動産株式会社の協力があつたことを記し、感謝の意を表する次第である。

凡 例

- (1) 第1図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図、「札幌東部」を使用したものである。
- (2) 挿図の土壌、溝状遺構実測図縮尺は20分の1、竪穴住居址実測図縮尺40分の1、石器実測図縮尺2分の1、3分の1、土器拓影図3分の1。
- (3) 遺構の平面図および断面図にかけた斜めのスクリーンは、擾乱層（含耕作土層）を示し、また黒の丸点は土器（P番号）、白抜き丸点は石器・剥片・礫（S番号）を指す。
- (4) 第1、3表の石器一覧表の右質略号は、以下の通りである。
Ob. (Obsidian): 黒耀石, H. S. (Hard shale): 硬質頁岩, Sa. (Sand stone): 砂岩, Gre. - mu. (Green mud stone): 緑色泥岩, And. (Andesite): 安山岩
また、計測値の内（ ）でくくったものは欠損していることを示している。

目 次

第1章	発掘調査に至る経過	9
第2章	遺跡の位置と環境	10
第3章	発掘調査の方法と層準	13
第4章	遺 構	14
	(1) 土 塚	14
	(2) 溝状遺構	17
	(3) 竪穴住居址	20
第5章	発掘区出土遺物	26
	(1) 土 器	26
	(2) 石 器	31
結 語		37
引用・参考文献		38

挿 図 目 次

第1図	S 153 遺跡付近地形図1 (1:25,000)	8
第2図	S 153 遺跡付近地形図2 (1:2,000)	11
第3図	S 153 遺跡 (昭和55年度) 発掘区および遺構関連図	13
第4図	S 153 遺跡 (80) ビット実測図	14
第5図	S 153 遺跡 (80) 第1号ビット出土石器実測図	15
第6図	S 153 遺跡 (80) 第3号ビット出土石器実測図	16
第7図	S 153 遺跡 (80) 第1号T ビット実測図	18
第8図	S 153 遺跡 (80) 第2号T ビット実測図	19
第9図	S 153 遺跡 (80) 第1号竪穴住居址実測図	21
第10図	S 153 遺跡 (80) 第1号竪穴住居址出土石器拓影図	23
第11図	S 153 遺跡 (80) 第1号竪穴住居址出土石器実測図	24
第12図	S 153 遺跡 (80) 発掘区出土石器拓影図1 (縄文早期)	26
第13図	S 153 遺跡 (80) 発掘区出土石器拓影図2 (縄文中期)	28
第14図	S 153 遺跡 (80) 発掘区出土石器拓影図3 (縄文中期)	30
第15図	S 153 遺跡 (80) 発掘区出土石器拓影図4 (絞縄文期)	30
第16図	S 153 遺跡 (80) 発掘区出土石器実測図1	32
第17図	S 153 遺跡 (80) 発掘区出土石器実測図2	35

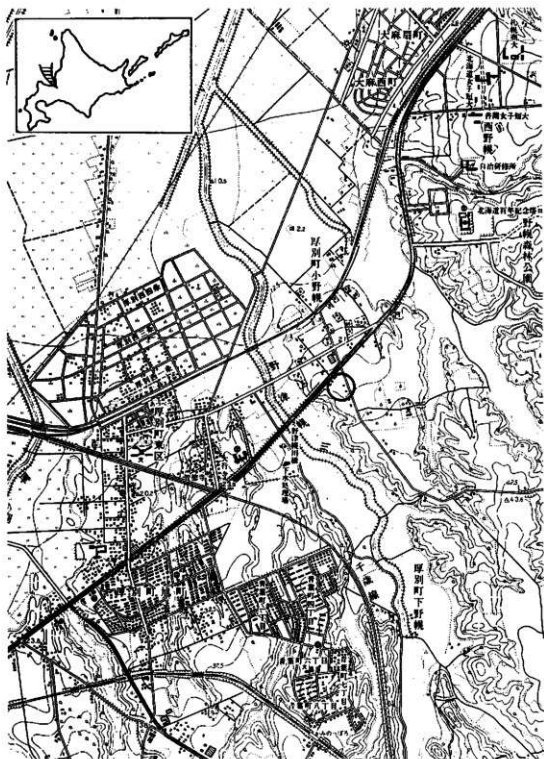
図 版 目 次

図版1A	S 153 遺跡 (80) 遺景
1B	第1号ビット (北西より)
図版2A	第2号ビット (西より)
2B	第3号ビット (北より)
図版3A	第3号ビット遺物出土状態 (北西より)
3B	第4号ビット (南西より)
図版4A	第5号ビット (北西より)
4B	第1, 3号ビット出土石器

- 図版 5A 第1号(右), 第2号(左) Tピット(各々南西, 北西より)
 5B 第1号竪穴住居址(北西より)
 図版 6A 第1号竪穴住居址遺物出土状態(北西より)
 6B 第1号竪穴住居址出土遺物1)
 図版 7 第1号竪穴住居址出土遺物2)
 図版 8A S 153 遺跡(80) 発掘区出土土器1)
 8B S 153 遺跡(80) 発掘区出土土器2)
 図版 9A S 153 遺跡(80) 発掘区出土土器3)
 9B S 153 遺跡(80) 発掘区出土土器1)
 図版10 S 153 遺跡(80) 発掘区出土土器2)

挿表目次

第1表 S 153 遺跡(80) 遺構出土土器一覧表	25
第2表 S 153 遺跡(80) 遺構 略表	25
第3表 S 153 遺跡(80) 発掘区出土土器一覧表	39



第1図 S153道跡付近地形図(1) (1:25,000)

第1章 発掘調査に至る経過

本書に報告するS153遺跡は、札幌市が軽工業団地を造成するにあたって昭和48、49年の2ヶ年にわたり調査を実施した地区の隣接地である。

昭和48、49年の調査では、縄文時代早期から縄文時代の墓壇群及びTピットと呼ばれる陥し穴群など約800個を超える発見があった。

昭和55年、前回発掘調査を実施した北側の隣接地が王子不動産株式会社によって開発されることとなり事前協議があった。前述のように開発予定地が、前回発掘調査を実施した地域から数10mしか離れていない北側であり埋蔵文化財包蔵地の範囲に含まれることは、間違いないことと思われ試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、縄文時代中期の土器、石器、陥し穴、墓壇等の存在が明白となり、取り扱いについて種々協議を重ねた。開発行為者側からは、用地の使用形態、周囲の開発による道路計画との調整等困難な問題があり、現状保存は不可能であるとの意向が示された。その意向を受けて検討した教育委員会としても、遺跡の主体部は、前回の調査で、ほぼ調査を完了しており、今回の開発予定地に含まれる部分が遺跡の北端に当ることから、発掘調査を実施することも、やむを得ないと判断するところとなった。

遺跡の存在する地域は、早くから農地として耕作されていたこと、一部は農地整備のための削平が行なわれるなど必ずしも良好な状態ではなかった。しかし、調査の結果は、住居跡、墓壇、陥し穴などが発見され、当初の見込み通りの成果を挙げる事ができた。 (加藤 邦雄)

第2章 遺跡の位置と環境 (第1図, 図版1A)

本遺跡の今次発掘地点は、札幌市白石区厚別町小野幌14番地にあり、国道12号線と市道試験場線とが交叉する南西側に位置している。S 153 遺跡全体からみるとその北側部分に相当するが、昭和48, 49年度の調査地域（加藤編1976）との間には浅い小谷が入っている。

S 153 遺跡は、旧豊平川の支流である「野津幌川」と「小野津幌川」によって解析された、ほぼ北側に向かってせり出す丘陵上にあり野津幌川の右岸に立地している。同岸沿いには、S 308(縄文早期ほか)、S 237(縄文早期：羽賀1976)、S 331, S 318遺跡(岩崎・宇田川・河野ほか1963)などの遺跡がある。

第2図に示した地形図は、昭和48年頃の地形図をベースにしてそれに現況の道路、建物を追加したものである。昭和48, 49年度調査地点は、東から北に向かって喰い込む小谷を取り込んで、約10,000m²の広さを調査したものである。標高は26.5~29mである。今次調査地点は、その北北西側の標高25.5~26mの所で、南南東側には、浅い谷が入っている。

(上野 秀一)



第2図 S153遺跡付近地形図2(1 : 2,000)

第3章 発掘調査の方法と層準

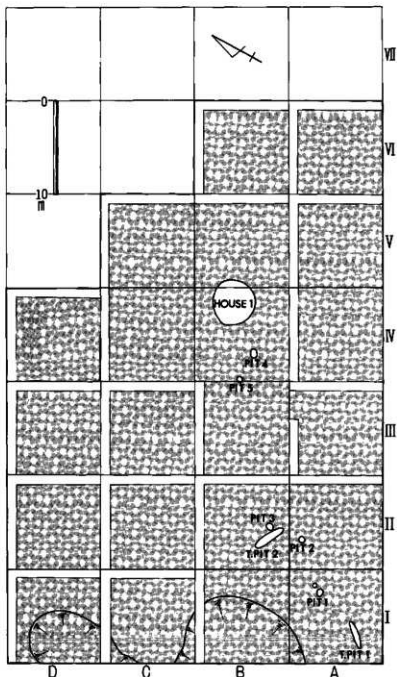
今回の開発予定地区の総面積は、10,095m²であったが、試掘調査の結果、遺物・遺構が検出されたのは、区域内の南側約 2,100m²であった。

グリッドは、基準線を南側のほぼ北東—南西方向の敷地境界線におき、10×10mの大きさに組んでいる（第3図）。

最終的な発掘総面積は、21グリッド、約2,014m²である。

遺跡の現状は、畑地で、表土下20～30cmまでは耕作土層である。その下は、黄褐色粘土層ないし黄褐色砂質土層が直接顔を出している。

なお、発掘区のI列において、2か所浅い沢状の落ち込みがあった。（上野 秀一）



第3図 S153遺跡（昭和55年度）発掘区および遺構関連図

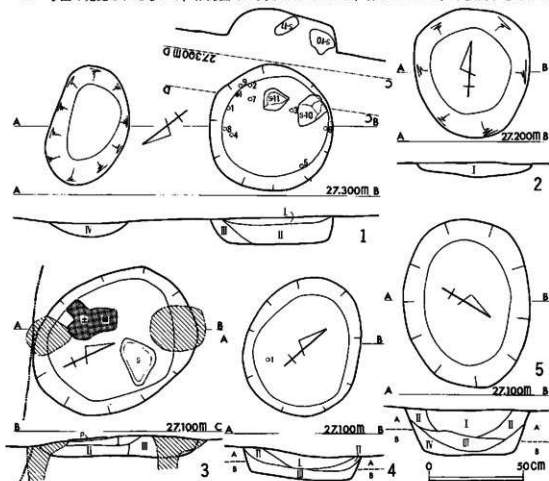
第4章 遺構

今次発掘地点からは、竪穴住居址1軒、土壇5基、溝状遺構2基が見つかった。これらは、発掘区の南側に入る浅い小谷沿いに分布している。

(1) 土壇 (第4～6図, 第17図50, 図版1B～7)

第1号ビット (第4図, 第5図, 図版1B, 4B-1～3)

A-1区で発見されたもので、確認面での大きさは67×66cm、深さは14cmで、不整円形を呈して



第4図 S153遺跡(80) ビット実測図

(1: 第1号ビット, 2: 第2号ビット, 3: 第3号ビット, 4: 第5号ビット, 5: 第4号ビット)

いる。壁面は、南側は直線的な立ち上がりを見せるが、北に向かうにつれて、少しずつゆるやかな傾きになっている。底面は、東側が若干低くなっているが、ほぼ平坦である。

層準を示すと、次の通り。

第Ⅰ層：黒褐色上層（炭粒が入る）。

第Ⅱ層：茶褐色土層（炭粒が若干入る）。

第Ⅲ層：暗褐色土層。

第Ⅳ層：暗黄褐色粘質土層（大粒の炭粒が所々に入る）。

第Ⅴ層：黄褐色粘質土層（乾くと細かなクラックが入る）。

なお、第Ⅰ～Ⅲ層は、全体に砂っぽい混合層である。

遺物は、南側の壁際から、原石面を1面だけ残し、あとは切断（あるいは欠損）された大きさ18×11cm、厚さ12cmの石皿（第5図3：S-10）と、硬質頁岩の原石を半載した礫（S-11）が墳底面について南側から出上した。なお、S-1～S-9は、覆土中出土の黒曜石の削片（S-1、2、5、6、8、9）、緑色泥岩の削片（S-3、4）、安山岩の礫破片（S-7）である。P-1は、覆土中出土の土器の細片で特徴は明確でない。また第5図1、2は覆土中出土の石器の破片である。

このピットの北東側で、不整楕円形をした、皿状の浅いピットが見つかったが、性格は不明である。

(R村 美智子)

石 器（第5図1～3、図版4B-1～3）

1は、黒曜石製の縦長削片のa面両側縁に不規則な小剝離が並ぶ資料で、左側縁はノッチ状にえぐれている。下端は欠損。

2は、黒曜石製の石鏃の先端と考えられるものである。素材は縦長削片で、調整剝離はa面両側縁とb面左側縁しか入っていない。製作途中で欠損した資料の可能性もある。

3は、安山岩製の石皿の破片である。厚さは12cmあるが、図示しなかった下底面は表皮が剝脱している。

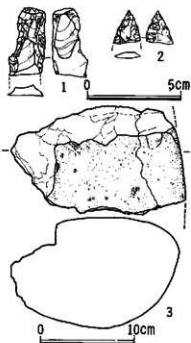
(上野 秀一)

第2号ピット（第4図2、図版2A）

A-Ⅱ区にあり、確認面での平面形は69×61cmで、深さは8cm。長軸方向は南-北で、不整円形を呈し、底面は、中央部がやや窪んでいる。壁面は、全体的にゆるやかな傾斜をもって立ち上がっている。

層準は、1層確認されたのみである。

第Ⅰ層：暗黒褐色上層（黒色土と粘土の混合層で、サラ



第5図 S153遺跡(80)第1号ピット
出土石器実測図

サワしている)。

本ピットは浅いうえに、層も確認面の土層と非常に似ているため、本ピットの時期および性格は明確にできない。

遺物は一切包含されていなかった。(田村 美智子)

第3号ピット (第4図3, 第6図, 第17図50, 図版2B, 3A, 4B-4, 5A左)

B-II区にある。確認面での大きさは90×70cm, 形は不整楕円形で、深さは11.5cmと大きさの割には浅い。長軸方向は南-北。壁面は、南西側と北東側の一部が攪乱をうけているが、比較的直線的な立ちあがりを見せている。壕底面は、ほぼ平坦。

層準は次の通り。

第I層: 黒褐色土層 (大粒の黄褐色の粘上粒を含む)。

第II層: 黄褐色粘質土層 (堅くしまっているが、若干の黒色土粒を含む)。

第III層: 暗褐色土層 (やや堅くしまっている)。

遺物は、西側の壁際から中央部へかけての確認面のレベルから後北C₂式のほぼ一団分の土器片 (第6図1~5, 図版3A) と東側から擦石 (第17図50) がみつかっている。本ピットは、上部が削平されている可能性が高いと考えられるので、第6図の土器は、壕底直上から出土したもので、本ピットに伴うと見てもさしつかえないだろう。

(田村 美智子)

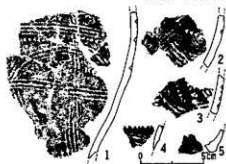
土器 (第6図1~5)

1~3, 5は、同一個体の破片と考えられる。文様は、帯縄文と三角形の連続刺突文からなるもので、所謂「後北C₂式」である。5は底部片。

4も、同種の型式の破片である。

色調は、赤褐色で、胎土中には比較的多くの砂粒を含む。

(上野 秀一)



第6図 S153遺跡(80)第3号ピット出土土器実測図

石器 (第17図50, 図版4B-4)

第17図50は、安山岩質の大型、扁平な河原石を用いた一種の擦石である。図示面側の中央部を中心に、かなり鋭利なものによる直線的なひっ掻き傷状のものがある。

(上野 秀一)

第4号ピット (第4図5, 図版3B)

B-IV区にあったもので、確認面での形態は、不整楕円形で、大きさは89×67cm, 深さは24cmである。長軸方向は東北東-西南西。底面は平らである。壁面は、しっかりしており、直線的に立ち上がる。

層準を示すと、次の通りとなる。

第I層: 暗黒褐色~茶褐色土層 (黄褐色の土粒をかなり含み、しまっていない。黒色土と黄褐色

土がまだら状に混り、色調が変化している。

第Ⅱ層：暗灰褐色土層（黒色土粒と炭粒を若干含み、やや堅くしまっている）。

第Ⅲ層：暗灰褐色粘質土層（堅くしまっている）。

第Ⅳ層：暗黄褐色粘質土層（若干の炭粒を含む）。

地山は、

A層：黄褐色粘質土層（やや、やわらかい）。

B層：黄褐色粘土層。

遺物は、一切出土していない。

（田村 美智子）

第5号ピット（第4図4，図版4A）

B—Ⅲ区とⅣ区にまたがって存在する。形態は不整楕円形を呈し、大きさは75×62cmで、横11、
横底面とも、西から東へかけて低くなっている。底面の形は、南東側と南西側が若干膨んでおり、
またその部分の壁面も、他と比べると、急な立ちあがりとなっている。確認面からの深さは14cm。
長軸方向は南南東—北北西である。

層位は次の通り。

第Ⅰ層：黒褐色—黄褐色土層（色調がまだら状に変化し、しまりが無い）。

第Ⅱ層：暗灰褐色土層（やや粘質があるが、若干黒褐色の土粒を含む）。

第Ⅲ層：暗灰褐色粘質土層（若干の炭粒が入り、堅くしまっている）。

地山は、

A層：黄褐色粘質土層（やややわらかい）。

B層：黄褐色粘質土層。

遺物は、全く出土していない。

（田村 美智子）

(2) 溝状遺構（第7，8図，図版5A）

第1号Tピット（第7図，図版5A右）

A—Ⅰ区にあるもので、確認面での大きさは315×83cmで長楕円形をしている。深さは96cmで、
横底面から横中央部までは、かなり急な角度で立ちあがっており、横口部に近くなるにつれて、ゆる
やかになっている。長軸方向は北東—南西、長軸は地形の傾斜に対して、ほぼ直交して掘られてい
る。横底部に近い壁面では、長軸はほぼ同じ幅で伸び、北東端部は、ゆるい曲線を描いて終結するが、
南東端部はかなりオーバーハングしている。横底面は、ほぼ平坦。横中央部の幅は、真中部分が他の
部分よりこころもち細めであるが、両端に向うにつれて、ややふくらみを持って行く。

層位は次の通り。

第Ⅰ層：黒褐色土層。

第Ⅱ層：暗褐色土層。

第Ⅲ層：黄色砂質土層（ブロック状の固まりが入っている）。

第Ⅳ層：褐色土層（やわらかい）。

第Ⅴ層：黄褐色砂質土質（汚れていて、軟質でボンボンしている）。

第Ⅵ層：黒色土層（サラサラしている）。

第Ⅶ層：黄褐色土層（砂っぽい）。

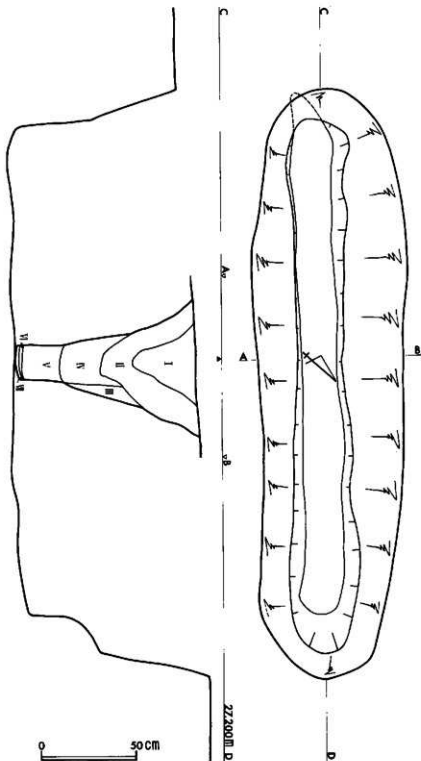
なお、第Ⅶ層は、有機物を多く含んだ層、第Ⅳ、Ⅴ層は、木の崩落によって流れ込んだもの、さらに上部層の第Ⅰ～Ⅲ層は、自然堆積層である。

遺物は、一切出土していない。

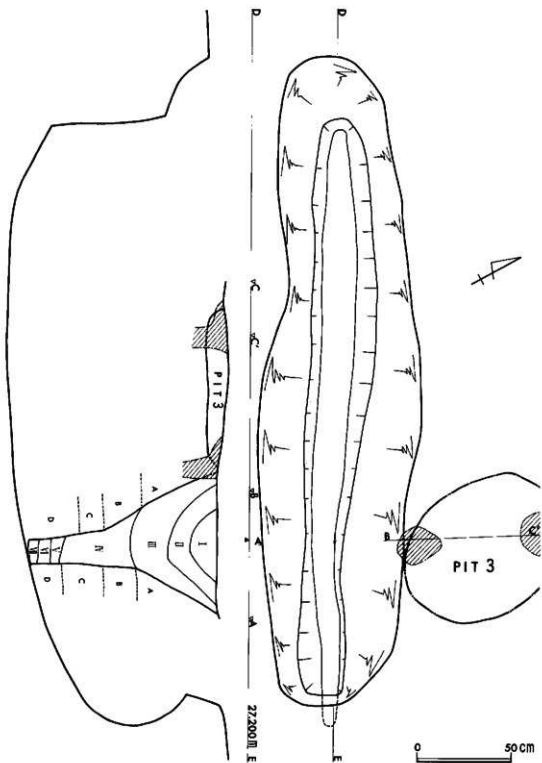
（田村 美智子）

第2号T ビット

（第8図、
図版5A左）



第7図 S153遺跡(80)第1号Tビット実測図



第8図 S153遺跡(70)第2号Tビット実測図

B-Ⅱ区にあり、第3号ピットと隣りあっている。長軸方向は東南東-西北西で、等高線と平行している。平面形は墳口部では364×87cmと長楕円形である。ただ西北西側は、南側の長軸線が若干へこんでいる。墳央部では、西南西の端部から中央部へかけてゆるやかにふくらみ、セクション・ライン付近で細くしめるが、東北東端へ向うにつれて広がっている。墳底部も、セクション・ラインでここもちくびれているが、全体にほぼ直すぐで、幅は狭く、すそすぼまりの形で端部へ向う。なお、西北西側の端は、かなりオーバーハングしている。墳底面は、中央部あたりがやや窪んでおり、東北東側の方が西南西側より浅くなっている。また墳口部に比べて、墳底面がかなり狭くなっているため、壁面も墳央部までは、ほぼ垂直に近い立ちあがりを見せるが、その上は、ゆるやかである。深さは102cm。

層位を示すと次の通り。

第Ⅰ層：黒褐色上層（サクサクしている）。

第Ⅱ層：茶褐色上層（粘土粒が入る）。

第Ⅲ層：暗褐色粘質土層。

第Ⅳ層：暗褐色砂質土層(Ⅰ)。

第Ⅴ層：暗褐色砂質土層(Ⅱ)（多量の有機物を含み、全体に暗い）。

第Ⅵ層：暗茶褐色土層（若干の有機物を含む）。

第Ⅶ層：暗灰褐色火山灰質砂質土層。

第Ⅴ、Ⅵ層は、有機物を多く含んだ層、第Ⅲ、Ⅳ層は、壁の崩落で流れ込んだ層、第Ⅰ、Ⅱ層は自然堆積層である。

地山の層位は、

A層：黄褐色粘土層（1～2cmの土粒の固まりが入る）。

B層：黄褐色粘質土層（火山灰質で炭粒を若干含む）。

C層：褐色火山灰層（やや堅くしまっている）。

D層：灰褐色火山灰層。

遺物は出土していない。

(旧村 美智子)

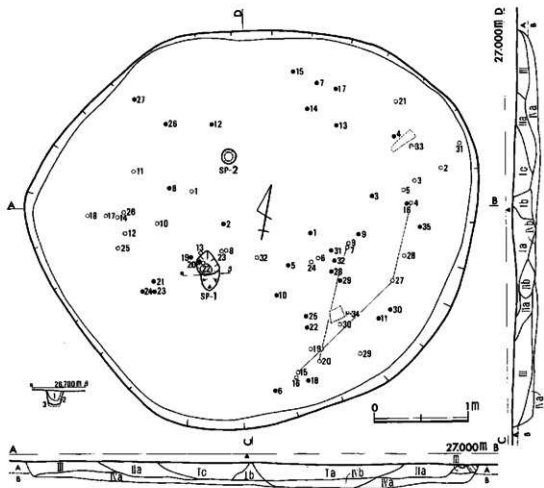
(3) 竪穴住居址

B-Ⅳ～Ⅴ区で、1軒みっかつただけである。

第1号竪穴住居址（第9～11図、図版5B～7）

本住居址は、灰黄褐色系統の砂質土層面（後述する地山のA層）で清掃した時点で、黒褐色～暗茶褐色の上層が2×3mの楕円形の範囲に分布していることから存在が確認されたものである。

最終的に掘り上がった平面形は、西側に頂部がある不整の剛丸五角形に近い形状をとる。大きさは、長軸4.81m、短軸4.25mで、長軸はN79°Eで、ほぼ東西方向といえる。深さは、確認面から、



第9図 S153遺跡(80)第1号竪穴住居址実測図

平均25cmである。

層堆積は、以下の通りである。

第I a層：黒褐色土層（黒色土中に、炭と黄褐色の土粒を平均して含む層で、住居址の南東側に分布する）。

第I b層：暗灰褐色土層（黄褐色と暗灰褐色の土粒と黒色土粒との混合層で、住居址の中央部に狭い範囲にマウンド状にある）。

第I c層：暗茶褐色七層（性状は、第I a層と同様の層で、若干の炭粒を含み、比較的サクサクしている。住居址中央付近の北西側に分布する）。

第II a層：暗灰褐色土層(I)（性状は、第I b層に近い混合層で、サクザクし、しまりがない。第I a～c層を取り囲むように存在する）。

第II b層：暗灰褐色土層(II)（レンズ状に入るもので、黄褐色土粒を多く含む明るい色調を呈する。第II a層より、さらにサクサクしている）。

第III層：暗灰黄褐色土層（第I b、II a層と同様の混合層で、各土粒は均一に混じっている。やや

堅くしまり、若干の炭粒が入っている。第IIa層の外周——壁際に分布する。

第IVa層：黄褐色粘質土層（堅い土粒をパッチ状に含み、炭粒が若干入っている）。

第IVb層：暗灰黄褐色粘質土層（上部の第Ia層の影響で、黒く汚染され、第IVa層より堅い土粒が少なく、しまらずぼそぼそしている）。

地山は、

A層：灰黄褐色～略黄灰褐色土層（所々汚染された所があるが、基本的には灰黄褐色系の砂質的な土粒からなる）。

B層：黄褐色粘土層（堅い土粒をパッチ状に含む構造である）。

以上の層の内、第Ia, b, c, IIa, b, III層の上部覆土は、黒色土と黄褐色粘質土の各土粒が細かく均一に混じった土層で、性状としては耕作土層に近い感じをうける。床面について地横している第IVa, IVb層は、構造的には地山のB層に類似するものであるが、土粒の結束が地山よりゆるく、また炭粒を含む点から区別できる。遺物は、上部の混合土層中検出のものがほとんどであるが、約1/5の資料は第IVa, b層に包含されていた。特に、第11図、図版7に示したような剥片類の約1/3は、本層から出土している。

付属施設としては、住居地の中央部付近の北西側と南西側から、柱穴様のものが2本みつかっている。SP-1は、大きさが24×22cmの不整円形を呈し、底面は南側に若干寄っている。深さは18cmある。南側には、21×17cmの舌状の張り出しがある。深さは最深約15cm。層位は $\alpha-\beta$ セクションに示したが、上部の第1層は黒色土層、下部の第2層は暗褐色土層で、黄褐色土と黒色土とがまだらに混合した土層である。第3層としたものは、地山のB層に相当する黄褐色粘土層である。SP-2は、径16cmのほぼ円形を呈する小ピットで、床面からの深さは8.9cmある。覆土中には、黒色土層が充填されていた。

炉址とか焼土はみつからない。

遺物の分布状態は、1つの特徴として、住居地の東側の壁周にそって土器片17点、剥片類14点が比較的まとまって出土している。あとはSP-1付近を含む住居地中央付近（若干南側）と西側（頂部）の壁周にそってみつまっている（図版6A：P-33）。（上野 秀一）

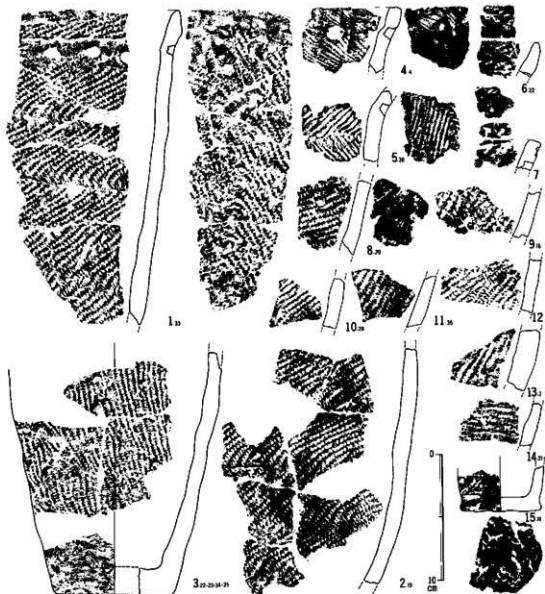
土器（第10図1～15、図版6B, 7-1, 2）

1, 4～7の口縁部片でみると、すべて「トコロ第6類」の仲間と考えられる。

1, 2（各々P-33, P-19）は、同一個体と考えられる。地文は、LRの単節斜行縄文で、表側は原体を横回転、内側は縦に回転したもので、内側の縄文は、胴下半分までつけられている。口唇部直下には、貼付による低い肥厚帯があり、その下に円形刺突文が巡る。肥厚帯上にも、地文が施されているが、上部は平らな碗状の「具で表面を引いたため地文は消えている。また、肥厚帯直下の刺突文列がある部分も解消されている。胎土中には、小石、砂粒を比較的多く含み、焼成はあまりよくない。色調は、灰褐色を基調とし、表側には所々すずが附着して黒ずみ、また黒斑もある。

4は、低い肥厚帯がつけられているが、その輪郭は不明瞭で、凹凸がある。口唇部は平坦に整形され、内面、口唇部上、肥厚帯部を含めてRLの単節斜行縄文が施されている。

5は、口唇部を欠損するが、口縁部はゆるく外彎するようである。地文は、単節羽状縄文を、表側は横回転、内側は縦回転している。6、7は、口縁部の肥厚帯部分の破片で、6では肥厚帯の断面形は三角形で、肥厚帯上にもLRの地文が施されている。7では、低い肥厚帯の上部と口唇部上に篋状工具による連続刺突文がある。色調は、4、6は表裏共に褐色。5、7は、表は暗茶褐色であるが、裏側は赤褐色を呈する。いずれも、小石、砂粒が比較的多く入り、繊維も微量含まれている。8～14は割部片である。地文は、すべてLRの単節斜行縄文である。13の器厚は18.5mmと厚いが、



第10図 S153遺跡(80)第1号壺穴住居址出土土器拓影図

あとは11~13mmである。

3, 15は底部片である。3は、推定底径約9cmで、こころもち張り出し、底面から4~5cmは、縄文施文後、整形している。地文は、R.L.15は、底径6.5cmの小型土器で、やはり底面は若干張り出し、底面の直上は整形されている。(上野 秀一)

石器 (第11図1~19, 図版7)

本住居址からは、黒曜石製の剥片23点、同割片21点、同石核? 1点、緑色泥岩ないし片岩の石斧の破片3点が出土している(図版7)。

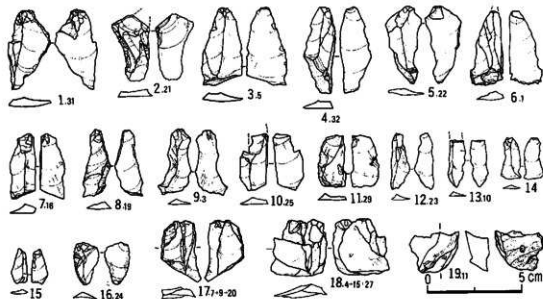
第11図1~18は剥片, 19は石核?と考えられる資料である。

1~18は剥片の長幅指数(長さ/幅)は、3.0~1.4までであるが、平均値2.2前後のものが多く、いずれも縦長剥片の範疇に入るものである。規格的には、長さ46~27mm, 幅23.5~12.5mmのものと、幅10mm以下(10~8.5mm), 長さ29.5~18.5mm程の幅の狭い例とに大きく分けられる。全計測可能剥片の長さの平均値は32mm, 幅は同様に15mmである。

これらの剥片の内、1では、a面右側縁にそって比較的背の高い小剥離が並び、2ではa面左側縁と右側縁の一部に小剥離がある。また、4, 15, 16にはごく一部に、不規則で、浅い小剥離があるが、あとは剥取された剥片のままである。

剥片のa面側の剥離面については、2と16を除いては、いずれも剥片の最終剥取方向とすべて一致し、連続的に同一打面から生産された可能性を示唆している。2については、横(ほぼ直交)と反対方向から、16は反対方向からの剥離がある。なお、17A~C, 18A~Cは、各々の3点の縦長剥片が接合した例である。

19は、b面側に原石面を残す角礫を素材にしたもので、a面左側面付近に上部を打面として、縦



第11図 S153遺跡(80)第1号竪穴住居址出土石器実測図

長的な剥片を生産した跡がある。その後、打面部分はb面側から剥離が入れられ、剥取痕のバルブはいずれも消失している。a面中央から左にかけて、白抜きで示した部分は、熱破壊による破損面である。(上野 秀一)

第1表 S153遺跡('80)遺構出土石器一覧表

挿図番号	遺構名	器種名	規 格				石質	備 考	
			長さ	幅	厚さ	重量			
11-1	H-1	縦長剥片	42.5	23.5	5.0	3.7	Ob.	S-31, 調整剥離あり	
2	H-1	縦長剥片	(35.0)	(20.0)	(3.5)	(2.0)	Ob.	S-21, 調整剥離あり	
3	H-1	縦長剥片	41.0	21.5	3.5	3.1	Ob.	S-5	
4	H-1	縦長剥片	46.0	16.0	4.0	2.9	Ob.	S-32, 小剥離あり	
5	H-1	縦長剥片	41.5	19.0	3.5	2.3	Ob.	S-22	
6	H-1	縦長剥片	(39.0)	(17.0)	(4.5)	(2.6)	Ob.	S-1	
7	H-1	縦長剥片	34.0	13.5	5.0	2.1	Ob.	S-16	
8	H-1	縦長剥片	35.5	12.5	4.0	1.4	Ob.	S-19	
9	H-1	縦長剥片	34.0	16.0	3.0	1.2	Ob.	S-3	
10	H-1	縦長剥片	(30.0)	(14.5)	(3.5)	1.4	Ob.	S-25	
11	H-1	縦長剥片	27.0	14.5	3.5	1.4	Ob.	S-29	
12	H-1	縦長剥片	29.5	10.0	3.0	0.5	Ob.	S-23	
13	H-1	縦長剥片	(25.0)	(8.5)	(2.0)	(0.4)	Ob.	S-10	
14	H-1	縦長剥片	21.5	10.0	2.0	0.3	Ob.	なし(フク土)	
15	H-1	縦長剥片	18.5	8.5	2.0	0.3	Ob.	なし(+), 小剥離あり	
16	H-1	縦長剥片	22.0	13.5	2.5	0.7	Ob.	S-24, 小剥離あり	
17A	H-1	縦長剥片	22.0	12.0	2.5	total	Ob.	S-9	
B	H-1	縦長剥片	32.0	14.0	3.0		3.3	Ob.	S-33
C	H-1	縦長剥片	28.0	14.0	2.0		Ob.	S-7	
18A	H-1	縦長剥片	(18.0)	(20.0)	(2.0)	total	Ob.	S-15	
B	H-1	縦長剥片	30.0	12.5	4.5		5.3	Ob.	S-27
C	H-1	縦長剥片	30.0	22.0	3.5		Ob.	S-4	
19	H-1	縦長剥片	(21.5)	(26.0)	(11.0)	(5.7)	Ob.	S-11	
5-1	PIT1	削 器	(36.0)	(18.5)	(6.0)	(4.0)	Ob.	フク土, 縦長剥片	
2	PIT1	石 鏃	(18.0)	(14.0)	(3.5)	(0.6)	Ob.	フク土, 破片	
3	PIT1	石 皿	(184.0)	(116.0)	(119.0)	(3280)	And.	S-10, 破片	
17-50	PIT3	擦 石	164	236	58	3,320	And.	S-1	

第2表 S153遺跡('80)遺構一覧表

ビット番号	区 名	平 面 形	規 模 (cm)		長 軸 方 向	挿図番号	図 版 番 号	出 土 品		備 考	
			横 口	深 さ				上 器	石 器		
堅穴住居址	B-IV, V	不整楕円五角形	481	425	25	N79°E	9	5B	P-1~35 (トコロ6)	S-1~32 (削器, 剥片類)	小ビット (SP-1,2) あり
第1号ビット	A-I	不整円形	67	66	14		4-1	1B	破片1 (覆土)	石皿, 磨削削器, 石鏃, 削片7 (覆土)	北東側で皿状の小ビットあり
第2号ビット	A-II	不整円形	69	61	8	N178°E	4-2	2A	なし	なし	
第3号ビット	B-II	不整楕円形	90	70	11.5	N176°E	4-3	2B	土器1個体 (後北C式) (口)	燧石 (底)	
第4号ビット	B-IV	不整楕円形	89	67	24	N61°E	4-5	3B	なし	なし	
第5号ビット	B-III, IV	不整楕円形	75	62	14	N154°E	4-4	4A	なし	なし	
第1号Tビット	A-I	長楕円形	315	83	96	N47°E	7	5A右	なし	なし	
第2号Tビット	B-II	長楕円形	346	87	101	N120°E	8	5A左	なし	なし	

第5章 発掘区出土遺物

(1) 土 器 (第12~15図, 図版8A~9A)

第12~15図は、本遺跡の発掘区から出土した土器群である。大きく、縄文早期(第I群)、縄文中期後半(第II群)、続縄文期後半(第III群)の3期に分けられる。

第I群 縄文早期 (第12図, 図版8A上)

2種ある。

第1類 (1~3)

貝殻文が特徴とされる土器群である。

1は、波状口縁で、口縁に一段の微隆起線文がめぐり、微隆起線上に貝殻腹縁による連続した刻目を付ける。微隆起線下の胴部には、貝殻条痕文が横位に施文されている。

2, 3は、胴部破片で器面には横位に貝殻条痕文が施文されている。

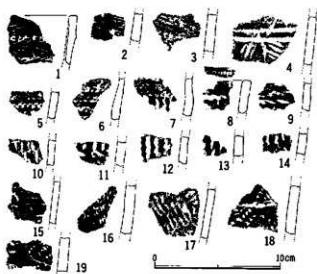
色調は、淡黄褐色(1, 3)、赤褐色(2)を呈する。胎土中には、砂粒を多く含んでいる。器厚は、7mm内外である。

沼尻式土器(沢1969)に類する。

第2類 (4~19)

組紐圧痕文、撚糸圧痕文、短縄文が特徴的な土器群である。施文原体、方法の違いにより、さらに3種に分けられる。

- (a) 組紐圧痕文が施文されたもの(4~7)。
- (b) 撚糸圧痕文が施文されたもの(8, 9, 18)で全例RL原体を用いている。
- (c) 短縄文が施文されたもの(7, 10~14)で、RL原体を用いるもの(7, 10, 11, 14)とLR原体を用いたもの(12, 13)とがある。
- 4, 15~19には、地文としての斜



第12図 S153遺跡('80)発掘区出土土器拓影(1)
(縄文早期)

行縄文が施文されており、R L原体(4, 17), L R原体(15, 16, 18, 19)が用いられている。

8は、口縁上にもL R原体を用いた縄文が施文されている。

色調は、4のみ黒褐色を呈し、他は淡黄褐色を呈している。胎土中には、全例砂粒を多く含んでいる。器厚は、5~8mmである。

東剣路Ⅲ式土器(沢1969)そのものである。(羽賀 憲二)

第Ⅱ群 縄文中期(第13, 14図, 図版8B, 9A)

本期の資料は、大略4類に分けられるが、いずれも縄文中期後半の所産である。なお、第5類は胴部および底部片を一括したものである。

第1類(1~9)

本類は、「トコロ第6類」の仲間である。一般的特徴として、口縁部は、肥厚帯がなくゆるく外彎するか、肥厚帯があっても低いもので、前者の例では、口唇部直下から地文が施されているだけである。また、円形刺突文が、2.5~3cmの間隔を開けて口唇部ないし肥厚帯直下を巡っている。個々にみると以下の如くである。

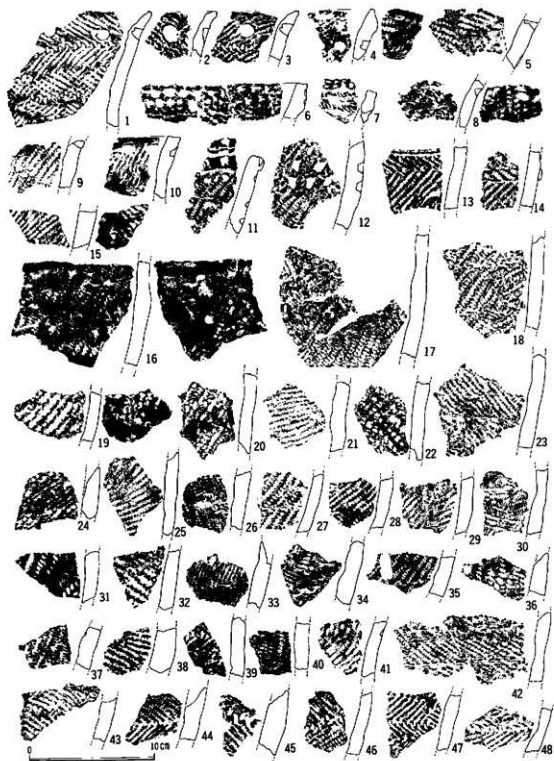
1~3は、口唇部直下に肥厚帯はなく、口縁部が、ゆるく外彎している例である。1は口縁部は、ゆるく外彎し、口唇部は、先細りに整形されている。地文は、第1種結束の羽状縄文で、口唇部直下から施されている。口唇部から約1.5cmのところに円形刺突文がつけられているが、これは竹管状の工具で表側から内側へ突き刺した後に、刺したまま周りをえぐるように工具を回して表側の孔を広げている。器体の内側にはナデ痕が残る。器厚は約0.8cm。胎土には、微量の繊維と細かな石粒や砂が混じっている。色調は、全体的に赤褐色をしており、表側は、所々黒くすすけている。焼成はよい。

2は、口唇部先端が、外にわずかに張り出すが、口唇部上は平担で、張り出し部分、口唇部上も含めて全体にR Lの斜行縄文が施されている。口唇部から約1.3cmの所に、先端のささくれだった工具を使い、下の方をえぐるようにして広げた円形刺突文がある。器体の厚さは約0.9cmとそう厚くない。色調は、黄褐色であるが、若干外側の方が赤っぽい。胎土には微量の繊維と細かな石粒が含まれている。

3は、地文は第1種結束による羽状縄文で、口唇部は先細りし、ゆるく外彎している。口唇部下約1.2cmの所に円形刺突文がつけられているが、これは竹管状の工具を使い、刺してから周りを押し広げるように回している。胎土中には、小さな石粒や砂がまじり、繊維も微量だが含まれている。焼成はよく、色は両面とも灰褐色を基調とし、所々暗赤褐色を呈している。

4, 6, 7は、貼付による低い肥厚帯が口唇部直下に巡るものである。

4は、口縁部に断面三角形の肥厚帯があり、その部分にも地文と同じL Rの斜行縄文をつけている。ただこの肥厚帯の直下の部分は、破片内では磨消されたようになっている。円形刺突文は竹管状のものを軽く突き刺してつけている。器体の厚さ約1.1cm。内部にも縄文がある。胎土には砂や細かな石粒がまじる。色は灰色がかった褐色で、全体に風化している。



第13图 S 153 淮阴(80)兔园区出土土器拓影图(2) (縄文中期)

6は、肥厚帯上には、篋状の工具で角を土器面にあてて横から刺してつけた連続刺突文が2段ある。また口唇部の上面も平らにして、同様の工具でつけた刺突文が連っている。器体の厚さ約1cm、胎土には小石や砂がまじり、繊維も微量含まれている。色調は、表側は黒褐色、内部は灰黄色で、焼成はよくない。

7は、肥厚帯上に地文のRLの斜行縄文をつけた後、破片内では篋状の工具で横に引いた幅広の沈線文状の文様があるが、右端には、刺突痕が残る。また、口唇部上にも、半截竹管状の工具による連続刺突文がある。色は、灰褐色を基調とするが、表側は黒ずんでいる。胎土中には、細かな石粒や砂が入っている。

5、8、9は、口唇部を欠損するが、円形刺突文が横に巡る部分の破片である。8には、内面にも縄文がある。色調は、5、8が白灰褐色であるが、表面には所々黒斑がある。9は、暗赤褐色を基調とするが内外面共に黒斑が認められる。

第2類 (10~12)

本類は、「柏木川式」(上野1978)と仮称したグループで、3点共棒状の工具による刺突文が横に巡るのが共通した特徴といえる。

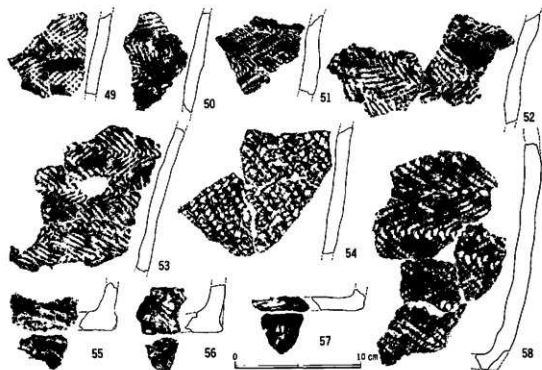
10は、破片内では口唇部直下に粘土を貼付し、器面と段差なく全体に厚く仕上げ、全体に地文の斜行縄文を施している。なお、口唇部直下と口唇部上および内面には、ナデ状の整形痕が顕著である。肥厚部上のナデ整形部分と地文の境付近には、角棒状の工具による刺突文が横に巡る。口縁部は、全体にゆるく外彎する。11は、破片内では、ほぼ真直に立上り、地文施文後、口唇部直下に、幅8~9mm程の貼付帯をつけている。地文は斜行縄文。口唇部上には、中空の材料を半截した工具(ただし、断面形は三角形状?)による深い刺突がある。貼付帯上にも、縦に刻目があるが、工具は不明。貼付帯の下には、断面が不整形の工具による刺突文(刺突後右にこころもち引きながら抜いている)が横に破片内で3条巡っている。12は、口唇部を欠損するが、破片上部に平らな篋状の工具による刺突文が横に2条ある。工具は、やはり右に傾けた後抜いている。地文(斜行単節縄文)は全面に施されていたと思われるが、刺突文列部分は、現在風化して判然としない。色調は10は、赤褐色を呈し、堅い焼成であるが、11、12は各々黒褐色、白褐色で、胎土中の砂粒が多く、もろい感じである。

第3類 (13)

1片のみである。口縁部付近の破片で、破片上部に半截竹管状工具による横走沈線文が1条ある。地文は、第1種結束による羽状縄文である。表面には、カーボンが付着し、黒褐色の色調を呈する。胎土中には、砂粒を多く含む。所謂「天神山式」ないしそれに後続する「紅葉山式」(上野1978)に対比できる。

第4類 (14)

本類も、1点のみであるが、燃りの方向の異なる地文を施こし(結束の有無は不明)、その境目に7~9mmの粘土紐を横に巡らしたもので、貼付帯の上にも地文がある。色調は、全体に白っぽい灰褐色で、胎土中には比較的多くの砂粒を含む。



第14図 S 153遺跡('80)発掘区出土土器拓影図3(縄文中期)

本資料は、「伊達山式」か、それに後続する「入江第三類」、「小野椋式」(上野1978)に対比できるものである。

第5類 (15~58)

15~54は胴部破片, 55~58は底部の破片である。

40点の胴部片の地文の内訳は, LR 18点 (45%), RL 6点 (15%), RLR 2点 (5%), LR+RL (第1種結束) 14点 (35%) である。器厚は, 16~18mmの厚い例 (15, 38, 45) もあるが, 10~13mmのものが主体を占める。色調は, 灰褐色ないし明灰褐色を基調とする。胎土中には, 小石粒, 砂を全体に比較的多く含む。

図示した4点の底部片は, いずれも軽い張り出しがある。

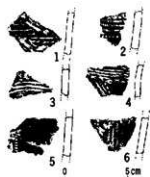
(田村 美智子)

第Ⅲ群 続縄文期 (第15図, 図片8A下)

微隆起縞文, 特殊縄文, 列点文が特徴とされる土器群である。いずれも後北C₂式土器の諸特徴を, 強く有している土器群である。

微隆起縞にて区画し, 中に特殊縄文を施す, さらに帯状の特殊縄文に沿って列点文を施す。

列点文は, 三角形をなすのが普通であるが (2, 3), 爪形



第15図 S 153遺跡('80)発掘区出土土器拓影図4(続縄文期)

(1)、半截竹管・凹形刺突具(4)が用いられた例がある。

5、6は、胴部破片でLR原体の縦走縄文がみられる。

色調は、暗褐色(2)、茶褐色(3)、他は全て淡黄褐色を呈する。

胎土中には例外なく砂粒を多量に含んでおり、器厚は7mm内外である。(羽賀 憲二)

(2) 石 器 (第16、17図、図版9B、10)

本遺跡の発掘区内からは、総数51点の石器類が出土している。器種としては、石鏃、石銛、両面加工石器の未成品、搔器、使用痕のある刮片、刮片石核、砥石、石斧(未成品)、石鎌、石皿などがある。発掘区内から出土した土器は、縄文早期、続縄文期末の資料が若干あるが、主体は縄文中期後半の土器群で、石器群も、縄文中期後半に伴出した例が主体を占めると考えられる。石質に関しては、第3表に明記してある。

石 鎌 (1~4)

4本の石鎌が見つまっているが、尖頭部先端の破片のため形状が伺い知れない例を除くと、(1)狭長なタイプと(2)無茎のタイプの2種ある。

前者は、1、2の資料で、1は基部側を、2は尖頭部側を欠損する。素材は、共に入念な両面調整が入っているため明らかではない。調整刻離は、押し刻離と考えられ、狭長な刻離が、石器中央部付近まで達する例が多い。全体形は、1でみると尖頭部先端は先鋭に仕上げられ、下半は破片内では、両側縁はほぼ平行している。2は、破片部がゆるい膨らみをもつ程度で、下端までゆるい角度——ほぼ両側縁平行するように仕上げられ、端部は若干欠損するが、丸味をもって終わっていたと思われる。

後者のタイプは、4の1例のみで、全長39.5mm、最大幅18mmの大型の無茎鎌である。尖頭部も長く幅広く、基部のえぐりも深く、石銛先の可能性もある。素材は、不明。

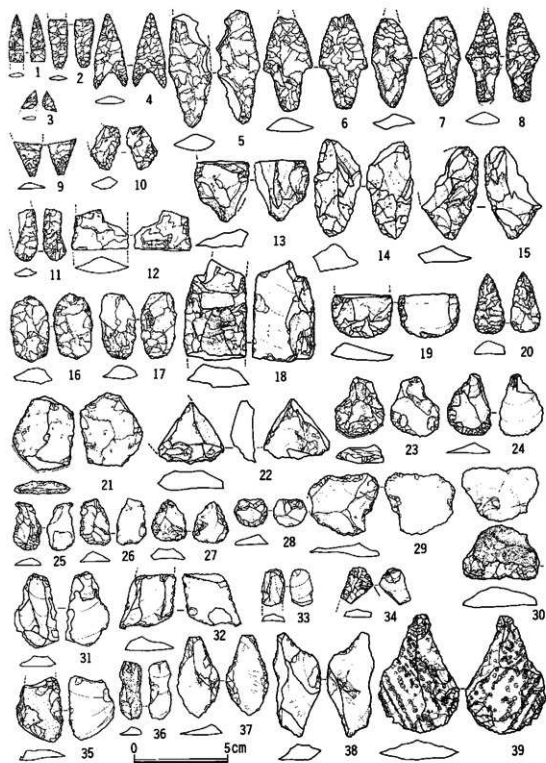
3は、推定される欠損部側の側縁の形状はやや開き気味とも考えられるが、調整は入念な押し刻離で、刻離痕は所々縞状に入っている所から(1)のタイプの石鎌の可能性が高い。

(1)のタイプの石鎌は、縄文早期に特徴的に伴う「長茎鎌」、「狭長鎌」の仲間と考えられ、石刃鎌文化との関連が考えられる(上野1975)。

石 銛 (先) (5~8)

5は、硬質頁岩製、他の3点は黒曜石製である。5は、現存長59.5mm、同最大幅22.5mmの大型品で、尖頭部先端をa面からみて右側(面)縁は、熱破砕で割れとんでいる。柄部および尖頭部は、共に長く、浅い逆刺がある。6、7は、尖頭部先端を欠く。6は、柄部端と基底には原石面がある。柄部は太いが逆刺は比較的強い。7は、a面下部に原石面を残し、逆刺は強くない。柄部端は尖る。8は尖頭部先端と柄部端およびa面右の逆刺部を小破損している。柄部および尖頭部は、6、7例に比べて細身である。

なお、20は、最終的には搔器として再加工されているが、形状、調整加工からみて本器種の柄部



第16图 S 153 遗址(80)发掘区出土石器实测图(1)

破片を利用した可能性が高い。

両面調整石器（未成品，破片）（9～17）

9は、縦長の剥片を用い、両面に平坦な剥離調整を加え、下端に尖頭部を作出しているもので、上部は欠損している。

10は、厚手の剥片を利用し、両面に調整を加え、石鏃状の形をつくろうとしているが、b面およびa面の側縁調整は、素材が厚いために、端部はいずれもstep fractureを起している。また、a面左上は欠損するが、尖頭部を作出以前に欠損したものの可能性が高い。

11は、良質の原材を用い、入念な両面調整を施している。図下端が丸味を帯びている点から石銛などの比較的幅のある器種の柄部破片の可能性が高い。

12は、ナイフ状石器が石槍などの大型の両面調整石器の破片である。調整は、平坦な剥離が石器中央付近まで達した入念なものである。

13～15は、素材に対する調整剥離の入り方とか、形状からみて、石銛クラスの両面調整石器の半製品（未成品）と考えられるものである。13は、図上部を大きく欠損し、a面下部には原石面が幅広く残る。また、b面の大きく素材表面を取り去った剥離も、step fracture状である。また、b面左側面は、miss blowによって、大きく割り取られた部分とも考えられる。14は、晶子の数多く入った黒曜石を利用し、両面に比較的大きい剥離を入れ形状を整えようとしているが、a面中央の高まりは、最終的に除去できなかったようで、a面右側縁からの剥離の端部は共にstep fractureを起し終っている。図上端は欠損。15は両面に粗い調整剥離が入っているが、最終的にb面右上に残る節埋面に沿って破損したため破棄された資料と考えられる。図下部には、三角形に尖頭部が作出されている所から石銛先のような石器を製作することを意図していたのであろうか。

16、17は、類似の楕円形を呈した資料である。16は、原材の表皮を剥いだ剥片を用い、両面に粗い剥離を入れたもので、素材にやや厚味があったためか、剥離は随所で、軽いstep fractureを起し、最終的には器体は大きくは減じられていない。17も、b面左から下端にかけては、step fractureを起している。しかし、a面下部両側の側縁調整は、比較的整然と入っている。この両資料は、これ自身ピエス・エスキューのような石器というよりも、やはり石鏃等の未成品の可能性が高いと考えられる。

攪器（18～30）

18は、上下端を欠損するが、所謂「石壘」の仲間に入る資料である。a面側にpatinaの古い素材面を残す厚手の縦長剥片を用い、a面両側縁の背の高い剥離を入れ、横断面形が台形に仕上げている。また、b面右側縁にも器厚を減じるためか粗い剥離が入っているが端部はほとんどstep fractureを起している。硬質頁岩製。

19は、刃部部分の破片で、a面の下端は比較的大き目の平坦な剥離が並び、刃縁はゆるく弧を描いている。また、b面両側縁にも剥離（inverse retouch）がある。硬質頁岩製。

20は、入念な両面調整の石器で、端部には刃角の高い調整剥離が入っている。柄部側は三角形に尖っている。また、b面側の剥離痕の稜は、やや磨滅した状態を呈している。本資料は、前述した

ように石銼先の柄部破片を再加工した資料の可能性がある。

21は、やや厚味のある幅広の剥片を利用し、bulbの高まりの強いb面側を表として、a面側から両端部に背の高い剥離を入れたdouble end scraperの一種である。なお、岡上部の刃縁は磨滅状態である。

22は、厚手の幅広剥片を利用し、a面の凹下部に背の高い調整剥離を加えたもので、a面左側面は欠損している。

23は、柄部を細身に仕上げたもので、刃部から柄部にかけて背の高い剥離が、ほぼ全周に亘って施されている。刃縁は弧状を描いている。

24は、薄手の縦長剥片を用い、素材端部側に弧状の比較的flatな刃部を作出したものである。

25～28は、小型の剥片ないし削片を利用した搔器である。25では、両側縁から下端にかけて剥離があり、刃縁は弧状である。26は、a面下端側の背が高く、比較的長目の剥離を入れ刃部としたもので、a面両側縁の一部にも不規則な剥離がある。27は、下端には細かな使用痕と側縁の一部に剥離痕があるのみの例である。28は、一次剥離面側の両側縁から下縁にかけて、短い背の高い剥離が走る。

29は、末広りの不整形の剥片のa面のほぼ全縁に、使用痕的な短かく不規則な剥離がある。

30は、やや厚手の幅広剥片の下端側に直線的に長目の剥離を入れ刃部としたものである。a面側には幅広く原石面が残る。

使用痕のある剥片および刮器ほか (31～41)

31は、縦長剥片であるが、古い段階に下端を欠損している。全体にpatinaは古く、a面の剥離の縁は磨滅状態である。なお、側縁に沿ってある小剥離は、最近の欠損である。

32は、やや幅広の縦長剥片であるが、上端(bulb側)は欠損する。両側縁に、刃こぼれ状の不規則な微細な剥離、下端に背の高い剥離(a面左側)と刃こぼれ状の剥離(同右側)とがある。

33は、狭長な縦長剥片のa面両側縁に背の高い調整剥離があるもので、下部は欠損。刮器の一種と考えられる。

34は、bulb部分の破片で、a面両側縁にそって背の高い調整剥離があるが、剥片の形状は下端に行くに従い広がる傾向がある。

35は、a面に原石面を残すやや幅広の縦長剥片を用い、a面右側縁にflatな剥離が並ぶ。bulb側は欠損。

36は、狭長な縦長剥片のa面左側縁にそって、やや背の高い剥離がある。

37は、硬質頁岩製の横長剥片で、側縁の所々に刃こぼれ状の不規則な小剥離がある。

38も、横長剥片である。b面左の旧打面部分には、punch holeの跡が残つたかある。図上下端の両側縁に、刃こぼれ状の浅く不規則な剥離が認められる。

39は、晶子が数多く入った黒曜石を原料とした、不整形の縦長剥片で、b面上部には、bulbの高まりを除去する剥離が入り、また下半の側縁にも不規則な剥離が所々に認められる。

40は、縦長の剥片のa面左側縁に、やや背が高く不規則な剥離がある。下端は欠損。

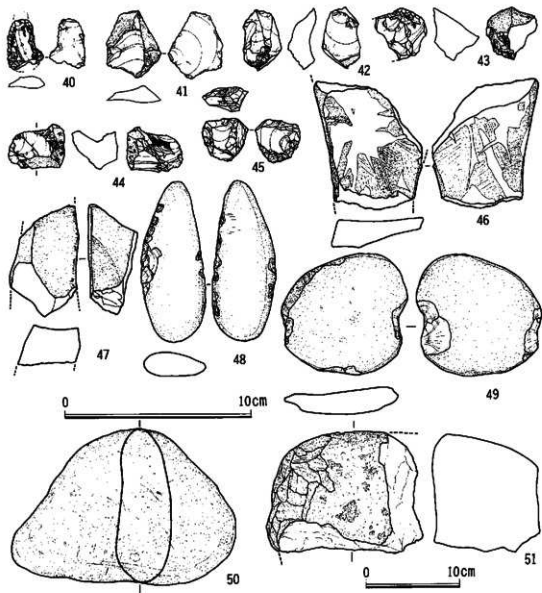
41は、やや幅広い剥片の側縁に、刃こぼれ状の細かな剝離が不規則にあるもので、表裏共に rolling をうけたように細かな傷がつき、patina は厚くみえる。

剥片石核 (42~45)

42~45の4点は、剥片石核と考えられる資料である。

42は、miss blow か意図的にかかは不明であるが、石核の剝離面を大きく剥ぎとった剥片である。a 面側に示した面は、上面を打面として縦長剥片を生産した痕が4枚残っている。

43は、節理面に沿って割れた資料で、b 面側は原石面で、これを打面として、最終的には鋭角の



第17図 S 153 遺跡(780)発掘区出土石器実測図(2) (ただし、50は第3号ピット出土)

角度で、a面側から剥片を生産している。

44は、最終的には、b面上部に示した大きな剥離面を打面として、a面側から剥片を生産しているが、小さい剥片しかとれていない。

45は、a、b両面中央に残る大きな剥離痕は、剥片を生産した跡と考えられるが、a面両側縁とb面右側縁にある細かな剥離は、その後に入れられたものである。最終的な、本資料の器種を決定することは難しいが、a面左側縁の鋭利な部分を刃先とした楔状石器（ピエス・エスキュー）とも考えられる。

砥石 (46, 47)

46, 47は、各々凝灰岩、砂岩製の砥石である。共に欠損部分が多く、本来の形状は伺いしれない。

石斧 (未成品) ? (48)

48は、緑色泥岩の扁平棒状の河原石で、その長軸側縁に敲打剥離痕があるだけである。研磨痕はない。これ自身、角を利用した敲石であったのか、石斧の未成品であったのかは判然としないが、敲打痕が、全体にあり、特に集中するのはa面左側中央付近のみである点と縁部の凹凸が激しく、平坦になる程使われていない点から、後者の石斧の未成品の可能性の方が高いのではと考えている。

石錘 (49)

49は、砂岩製の扁平な河原石を用い、両端に紐かけ用の凹みを剥離によってつけたものである。重量は、81g。なお、上下の側面は敲打具として用いたためか、面が平坦になるまで磨滅状態になっている。

石皿 (51)

51は、石皿の破片で、厚さは約11cmある。図示面は主要な使用面と考えられ、若干凹んでいる。反対の面は一部凹んだ所には原石面を残すが、凸部はほぼ平坦である。しかし、面には細かな凹凸がある。側面は、原石面のままの部分と大きな剥離が及ぶ部分とがあり、下底面と接する部分の縁辺（角）は、平坦に擦り減った状態になっている。（上野 秀一）

結 語

以上、昭和55年度に調査したS 153 遺跡について成果を報告してきた。

今次調査地区は、前回土壌（墓）と溝状遺構が数多く検出された調査区（加藤編1976）とは違い、5基の土壌、2基の溝状遺構と竪穴住居址が1軒みつかっただけである。

土壌については、壕内出土資料から、時期が判断できるのは第3号ピットだけで、その時期は「後北C₁-D式」期である。竪穴住居址は、床面ないし床面直上出土の半完形土器から判断して、所謂「トコロ第6類」期の所産と考えられる。ただ、炉址（ないし焼土）とか柱穴といったものは明確な形ではみつかっておらず、また壁および床面の検出が極めて困難であったため、その平面形についても不明確な部分があった。同様な例は、野幌丘陵および月寒台地上（白石神社遺跡、S 267・268、S 265、S 255遺跡ほか）と紅葉山砂丘（N 293、N 309 遺跡）でも検出されており、その時期は縄文中期中葉から後半がほとんどで、特に「トコロ第6類」のグループが多い。

遺物については、資料点数が少なく、特徴をつかみ切れないが、縄文早期と続縄文期の土器が若干例あるが、その主体は縄文中期後半の資料である。すなわち、「トコロ第6類」と「柏木川式」、「天神山式」、それに余市式系の土器が若干数ある。

ところで、本遺跡を含めて市内域の各遺跡からは、この縄文中期後半の土器が、必ずといってよい程、普遍的にみつまっている。このことは、逆にこの時期に人間集団の活発な動きがあったことを間接的に証拠だてているように考えられる。石器群の組成でみても、後半期は道内全域にわたり、石鏃、石匙、搔器、石皿、擦石の数が減り、不定形剥片に簡単な二次加工があるものが多いだけに変化する。住居も、前述した例のように定形的な形態や明確な炉址、整然たる配置をした柱穴を伴う例は稀である。この流れは、道内のみならず各地様相を変えながらも、全国的規模でみとめられる。この点について、安田喜憲（1980）は、狩猟・採集社会のゆきづまりに原因があり、「豊かな自然の恵みの下で発展した文化も、人口増加に自然の再生産が追いつかず、ついには崩壊した…。そして、こうした自然と人間のかかわりの矛盾に拍車をかけたのが、気候の変化ではなかったか。」（p. 164）と述べている。道内各地の花粉分析の結果をみても、約3,700～4,000年前を境にして、気候が冷涼化しはじめたといわれる（五十嵐・熊野1974）。

そして、関東、東北地方、道南西部の太平洋側では、次の縄文後期の段階に入って貝塚が著しく増えるが、これらの貝塚がつくられた期間をみても、中期後半の段階から後・晩期へと引きつがれた遺跡が多く、結局縄文中期後半期の胎動は、縄文後期的社会への変質過程とも解釈できるかもしれない。（上野 秀一）

〔引用・参考文献〕

- 五十嵐八枝子・熊野純男 1974「札幌北方低地帯における沖積世の古気候変遷」『第四紀研究』13—2所収
- 岩崎隆人・宇田川洋・河野本道ほか 1963「札幌市付近の遺跡——収録篇・分布図篇」『郷土の科学』41/42所収
- 上野秀一編 1975「S 256 遺跡」〔S 256, S 257, S 253 遺跡〕札幌市文化財調査報告書Ⅻ所収
- 上野秀一 1978「石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について——考古学資料からみた紅葉山砂丘、花畔砂堤列の固定年代」『北海道考古学』14所収
- 加藤邦雄編 1976「S 153 遺跡」札幌市文化財調査報告書Ⅹ
- 沢 四郎 1969「道東における早期縄文土器の編年について」『銅路史学』創刊号所収
- 羽賀憲二 1976「道央部に於ける縄文時代早期、平底土器群の様相について——札幌市S 237遺跡発掘報告を中心として」『北海道考古学』12所収
- 安田喜彦 1980『環境考古学事始』（単）

第3表 S153遺跡(780)発掘区出土石器一覧表

検出番号	器種名	規 格				材質	備 考
		長さ	幅	厚さ	重量		
16-1	石 鏃	(25.0)	(8.0)	(2.0)	(0.5)	Ob.	狭長
2	石 鏃	(26.0)	(10.5)	(2.0)	(0.7)	Ob.	狭長
3	石 鏃	(10.5)	(6.5)	(2.0)	(0.15)	Ob.	狭長?
4	石 鏃	39.5	18.0	4.0	2.0	Ob.	無蓋
5	石 銛(先)	(59.5)	(22.5)	(8.5)	(10.7)	H.S.	
6	石 銛(先)	(50.0)	(26.0)	(7.0)	(7.5)	Ob.	
7	石 銛(先)	(47.0)	(21.5)	(6.5)	(5.5)	Ob.	
8	石 銛(先)	(47.0)	(18.0)	(6.5)	(4.2)	Ob.	
9	両面調整石器	(18.5)	(15.0)	(3.0)	(0.6)	Ob.	破片
10	両面調整石器	(23.0)	(14.0)	(6.0)	(1.9)	Ob.	破片
11	両面調整石器	(28.0)	(11.5)	(4.0)	(1.7)	Ob.	破片
12	両面調整石器	(21.0)	(30.5)	(8.5)	(5.8)	Ob.	破片
13	両面調整石器	(32.5)	(28.5)	(9.5)	(8.9)	Ob.	破片
14	両面調整石器	(51.5)	(24.5)	(13.5)	(13.1)	Ob.	破片
15	両面調整石器	(49.0)	(26.5)	(8.5)	(9.9)	Ob.	破片
16	両面調整石器	34.5	21.0	8.0	6.0	Ob.	楕円形
17	両面調整石器	34.5	19.0	7.0	4.8	Ob.	楕円形
18	播 磨 器	(53.0)	(33.0)	(10.5)	(24.7)	H.S.	「石距」
19	播 磨 器	(23.0)	(32.0)	(8.5)	(6.3)	H.S.	
20	播 磨 器	31.5	16.5	7.0	2.9	Ob.	石銛(先)を再調整?
21	播 磨 器	39.5	32.0	6.5	12.4	Ob.	ダブル・エンドスクレイパー
22	播 磨 器	(32.5)	(35.0)	(10.0)	(13.5)	Ob.	
23	播 磨 器	31.0	26.0	9.5	8.3	Ob.	
24	播 磨 器	32.0	23.0	5.5	3.2	Ob.	
25	播 磨 器	15.5	14.0	4.0	1.4	Ob.	小型
26	播 磨 器	24.5	15.5	5.0	1.8	Ob.	小型
27	播 磨 器	21.5	19.0	3.5	2.2	Ob.	小型
28	播 磨 器	14.5	18.0	5.0	1.2	Ob.	小型
29	播 磨 器	33.0	36.5	7.0	6.2	Ob.	
30	播 磨 器	28.5	41.0	10.5	10.6	Ob.	
31	使用痕のある剥片	(39.0)	(22.5)	(5.5)	(5.4)	Ob.	
32	使用痕のある剥片	(28.0)	(26.0)	(7.0)	(5.9)	Ob.	
33	使用痕のある剥片	(19.5)	(12.0)	(3.5)	(1.1)	Ob.	

採回番号	器 種 名	規 格				石質	備 考
		長 さ	幅	厚 さ	重 量		
16-34	使用痕のある剥片	(19.0)	(14.5)	(4.0)	(1.2)	Ob.	
35	使用痕のある剥片	(34.0)	(24.0)	(5.0)	(4.5)	Ob.	
36	使用痕のある剥片	30.5	11.5	4.0	1.6	Ob.	
37	使用痕のある剥片	(42.5)	(22.0)	(5.0)	(3.8)	H. S.	
38	使用痕のある剥片	55.0	24.0	8.0	8.8	Ob.	
39	使用痕のある剥片	62.5	43.0	10.0	24.3	Ob.	
17-40	使用痕のある剥片	(25.5)	(19.0)	(6.5)	(2.5)	Ob.	
41	使用痕のある剥片	36.0	28.5	9.0	6.4	Ob.	
42	剥 片 石 核	32.0	20.5	12.5	7.6	Ob.	
43	剥 片 石 核	27.5	27.5	23.0	8.7	Ob.	
44	剥 片 石 核	23.0	30.5	22.5	13.8	Ob.	
45	剥 片 石 核	23.0	24.0	13.0	6.5	Ob.	ビエス・エスキーユ?
46	砥 石	(68.0)	(51.0)	(14.0)	(86.0)	Sa.	
47	砥 石	(59.0)	(36.5)	(26.5)	(45)	Sa.	
48	石 斧 ?	84.5	33.0	12.5	55.0	Gre- mu.	未完成品?
49	石 錘	64.0	65.0	12.0	81.0	Sa.	
50	擦 石	164	236	58	3320	And.	第3号ビット横断面
51	石 皿	(129)	(165)	(111)	(3650)	And.	破 片

圖 版

土 器 縮尺 $\frac{1}{3}$

石 器 縮尺 $\frac{1}{2}$ (剝片石器)

縮尺 $\frac{1}{3}$ (礫石器)



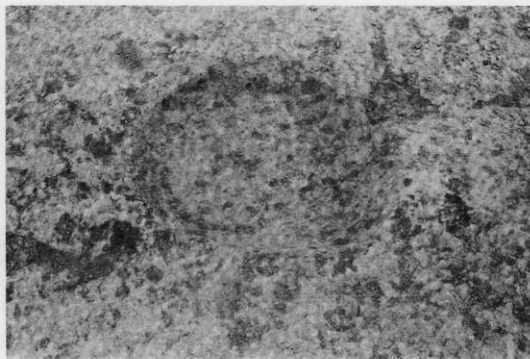
A S 153 遺跡 ('80) 遠景



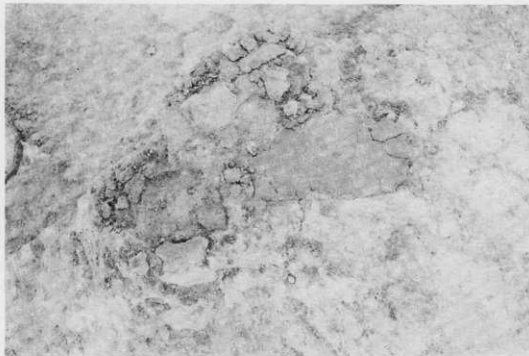
B 第1号ピット(北西より)



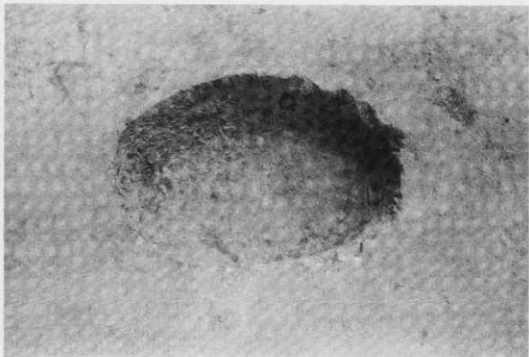
A 第2号ピット(西より)



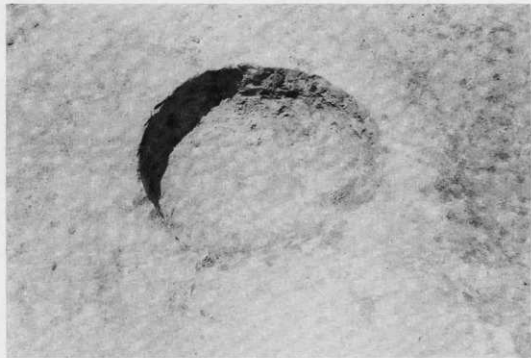
B 第3号ピット(北より)



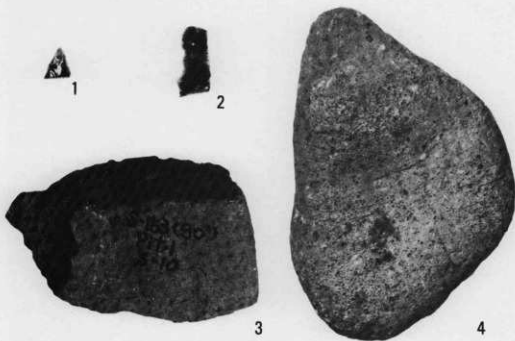
A 第3号ピット遺物出土状態(北西より)



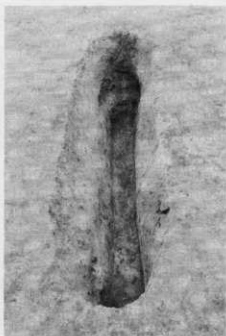
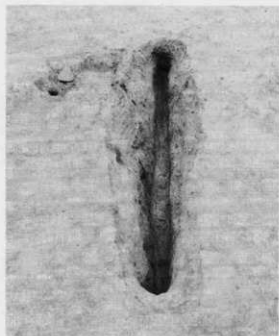
B 第4号ピット(南西より)



A 第5号ピット(北西より)



B 第1, 3号ピット出土石器(1~3:第1号, 4:第3号)



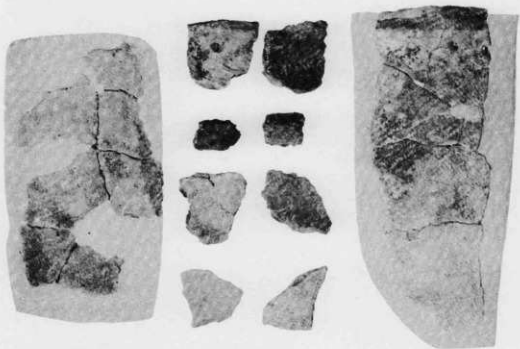
A 第1号(右), 第2号(左)Tピット(各々南西, 北西より)



B 第1号整穴住居址(北西より)



A 第1号竖穴住居址遺物出土状態(北西より:P-21)



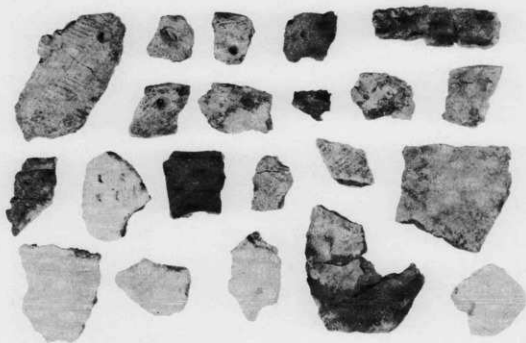
B 第1号竖穴住居址出土遺物(1)



第1号竖穴住居址出土遺物2)



A S 153 遺跡('80)発掘区出土土器(1)(縄文早期, 続縄文期)



B S 153 遺跡('80)発掘区出土土器(2)(縄文中期)



A S 153 遗址('80)尧墟区出土土器(3)(绳文中期)



B S 153 遗址('80)尧墟区出土石器(1)



S 153 遺跡 ('80)発掘区出土石器(2)

札幌市文化財調査報告書 XIV

S 153 遺跡

—1980年度発掘調査—

昭和57年3月15日印刷

昭和57年3月20日発行

発行者 札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目
印刷所 富士プリント株式会社
札幌市中央区南16条西9丁目